

社会におけるアクターとしての外来生物

—様々な社会領域とジャンボタニシ—

西尾さつき

名古屋大学大学院生

本研究では、様々な社会領域において、農業被害をもたらす外来生物ジャンボタニシがアクターとして、各アクターといかに関係し、ジャンボタニシを通じて異なる社会領域同士がいかに関係しているか検討した。ジャンボタニシが関連する法制度の変化や農業被害に、ジャンボタニシの近縁種が流通する観賞魚業界という社会領域が反応していることが示された。また、農業の領域でのジャンボタニシと個々の農業者の間には、様々な外部要因による影響がある。また、ジャンボタニシからの働きかけへの農業者の応答も駆除という行動に留まらず、複雑な関係にある。また、外来生物としてのジャンボタニシの働きかけが、その被害防止に用いられる農薬の展開の要因となっている。このように、外来生物が社会へ埋め込まれ、時にアクターと化していることは、今後外来生物に関する問題の解決を試みる際に、社会的な要素を考慮するための重要な視点であると考えられる。

キーワード：外来生物、ジャンボタニシ、農業被害、アクター

I はじめに

1. 研究の背景

外来生物¹⁾とは、過去、あるいは現在の分布域外に導入された種、亜種、変種などの分類群である。導入とは、人為によって直接的、間接的に自然分布域外へ移動させることを指す。外来生物は、長期的観点から生物多様性を脅かす重要な課題の一つと認識されている（日本生態学会、2002）。そのため、生態学や生物学の分野では、外来生物による生態系への影響を評価する研究が行われてきた。近年はさらに、影響の制御や生物管理の手法を検討することを目的とした研究が進められている（たとえば、村岡、2010；中井、2010）。こうした研究は、生態系被害の把握や軽減を主な目的としたもの（たとえば、黒川、2011；河村、2011）と、農業や水産業などの産業への被害把握や軽減を主な目的としたもの（たとえば、江草・坂田、2009）の二つに大きく分けられる。また、セアカゴケグモ*Latrodectus hasselti*

のように人間に危害を及ぼす外来生物の場合は、医学や衛生学の視点で取り上げられる場合も多い（吉田ほか、2003）。

このように、外来生物に対する研究は、あくまで生態系や特定の産業における被害の軽減といった視点で論じられることがほとんどであった。ただし、実際に外来生物への対処を進めるためには、法律の整備や実効性のある政策の実施、社会的な意義の確認が必要であることが指摘されている²⁾。これに反応するように、外来生物の経済効果によるプラスの側面と、生物多様性の消失によるマイナスの効果を検討した宇津井（2011）や、外来生物への意識や、対策への支払意志額を検討した西川ほか（2011）、柘植（2011）によって研究が行われている。

しかし、外来生物が関係する社会背景へ言及する研究は、地域におけるウチダザリガニ*Pacifastacus leniusculus trowbridgii*の歴史的な文脈や住民の経験知を明らかにし、今後のあるべき管理体制を論じた二宮（2011）の研究、奄美大島に